

## 求められる演技評価を考える

|          |               |
|----------|---------------|
| コーディネーター | 遠藤 幸一 (日本大学)  |
| コーディネーター | 赤羽 綾子 (東海大学)  |
| シンポジスト   | 佐藤 道雄 (千葉大学)  |
| シンポジスト   | 笹田 弥生 (國學院大学) |

D スコアがオープンエンドになったことより、難度面での格差は相対的評価なく、その算出が可能となっている。一方、E スコアについては 0.1、0.3、0.5、1.0 という実施減点の段階が 1 つ変わるだけで 0.2 の開きがあり、そのどちらで判断するかによって評価が大きく変わる可能性があり、また、10 点満点での減点法のため、減点のない演技以上に習熟度を表現した美しく雄大な演技を評価することができない状況にある。さらに、難しさとできばえの評価が分業化されていることから、演技全体の印象から評価された序列と実際のそれとが異なるとの意見も出されることはあるが、ルールがある以上、勝つためには、自分の理想から離れていたとしてもルールを前提にした高得点を獲得する演技を考慮しなければならない。

そこで、本シンポジウムでは、よりよい採点規則を考えていくプロジェクト研究を進めている佐藤、笹田両先生を交え、今夏に開催された第 30 回オリンピック・ロンドン大会の演技と評価にスポットを当て、現行ルールを頭から切り離し、多くが持っている評価したい技、組合せ、印象など様々な要因を洗い出し、未来のルールの資料づくりを目的とする。

### <シンポジウム展開>

シンポジウム前に、第 30 回オリンピック・ロンドン大会でのいくつかの演技（比較のための 2 演技を数組準備）を映像で流し、参加者全員に対する「できばえ」を中心に、どこを減点し、どこを高く評価したいのか、メモを取った上でどちらの演技を上位にしたいのか相対評価をしてもらう。その上で、シンポジウムにおいて、シンポジストにより、減点部分と高評価部分、並びに相対評価結果を私見として発表し、フロアを入れて意見交換を進めていく。

- できばえにどれほどの点差をつけるべきなのか？
- 演技評価に加えられるべき指標は？
- その他